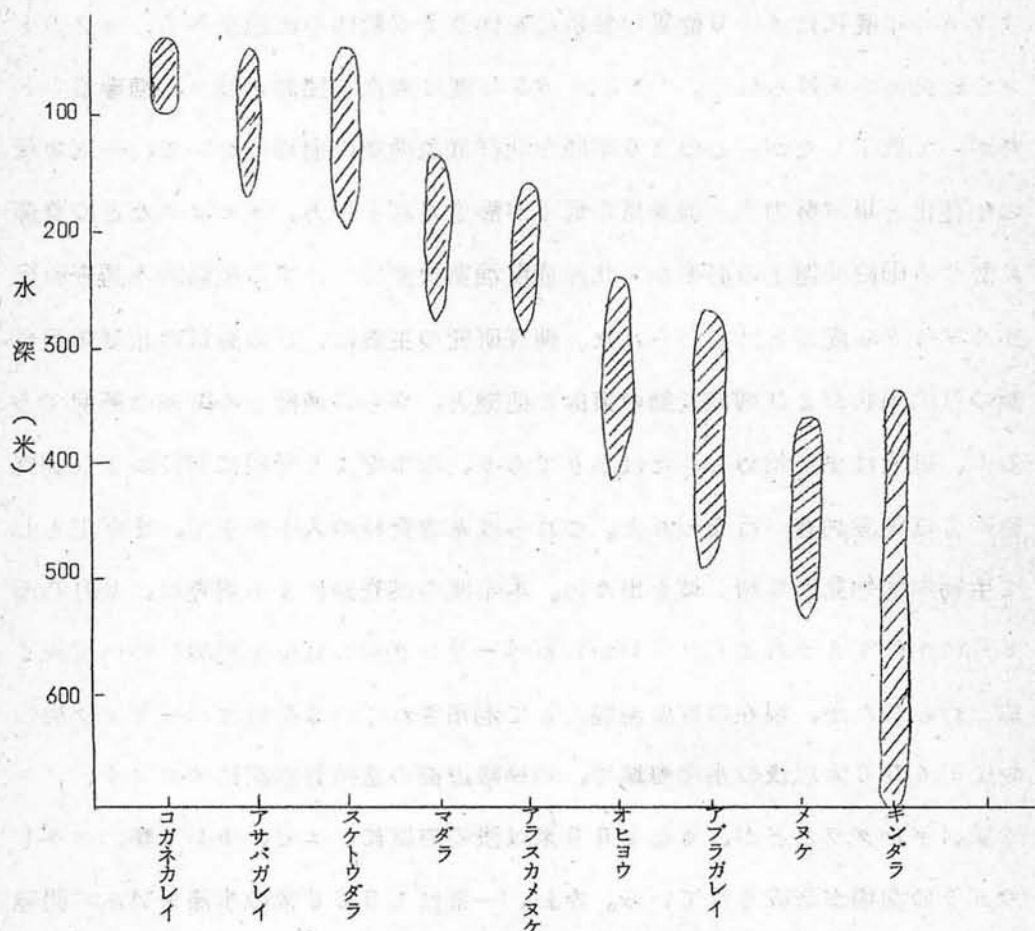


2. 北洋底魚資源研究の現状と環境調査の問題点 (要旨)

木部崎修 (東海水産研究所)

ベーリング海域において北洋底曳漁業が初めて行なわれたのは1929年で、アラスカ沖においてカニ及びフィッシュミールを目的として底曳漁業調査が行なわれたのが最初であるが、商業ベースによる本格的な船団操業が行なわれるようになったのは1954年からで、現在までにまだ近々10年を出ない。しかしその間ベーリング海域への出漁船団数は年を追って飛躍的に増大し、1961年度には400餘隻の独航船を伴う33船団の出漁をみて、62万トンの総漁獲があげられた。'62.'63年度は漸次船団数が減り、漁獲量もしたがって低下したが、この10年間の北洋底魚漁業の過程において、一部魚種の小型化と単位努力当り漁獲量の低下が懸念される一方、オヒョウなどの資源に関する国際問題上の必要から北洋底曳漁業資源についての組織的な調査研究が1962年度からはじめられた。調査研究の主眼は、この海域の重要魚種資源の量的現状および増減変動の実態の把握と、さらに漁獲との関連の解明であるが、研究はまだ始められたばかりであり、昨年度より母船に委託および調査船による実測調査が行なわれた。これらは基礎資料の入手が主で、また主として生物学的知見の集積の域を出ない。本年度の調査船による調査は、5月乃至8月にかけて3カ月にわたりおおむねベーリング海の底曳全漁場について浅く広く行なつたが、現在の底曳漁場として利用されている海域はベーリング海のおよそ600米以浅の水深海域で、陸棚縁辺部の急傾斜水深にオヒョウ、メヌケ類、ギンダラなどが、また200米以浅の海域に、エビ、カレイ類、スケトウダラの漁場が形成されている。なお、一部は1,000米の水深を越えて開発が進みつつあると思われる。本年度の調査は5~7月の限られた時期の結果であるが、この時期の主要魚種の水深分布を模式図的に示すと図のようになる。

海洋環境についての調査の現状は、すべてが今後課題せられた重要問題であり、資源の増減変動との関連、および、漁況、（分布、移動との関連）上からも今後重要視される。しかし底層海洋環境の調査は、主として技術的な困難性と、さらに研究機関では限られた水域および短期間の断片的資料しか得られないということのために、従来の底層資源の研究において、兎角、環境の解明が遅れている実情にあると思われる。この隘路を打開するために、操作の容易な観測器の開発と、ほぼベーリング海の全域に分散している母船団との連携協力態勢が特に必要と考えられる。



6～7月におけるベーリング海主要魚種の主分布水深（模式図）